記憶の呪い

上郡高等学校
横田ゆずか

遠い昔の記憶。私が忘れたかった記憶。忌まわしい呪いのような記憶。

小学生の時、授業で描いた絵が表彰された。その時、祖母が褒めてくれて、一個だけ欲しいものをなんでも買ってくれると言った。ずっと考えて、考えて。欲しいと言ったのは、一冊の本だった。本を見たとき、祖母は「そんな勉強にならないもの買わない」そういった。祖母の言う“なんでも“は、”勉強になるものならなんでも“という意味だった。その時、私の思うなんでもと祖母の思うなんでは違うことを知った。人の言葉の裏に、隠された意味を学んだ。そのあと、祖母は姉に本を買った。どうしてって言いたかった。でも、その時はまだ祖母のことが好きだったから、何も言えなかった。褒められた時の嬉しさは、

もうどこにもなかった。私の中に残ったのは、嘘つきと言って泣く、私の心だけだった。今になって考えたら、姉は初孫なのだから仕方がなかったのかもしれないと思う。それでもその差が当時の私にとってとても悲しいことだったのには変わらない。小さな積み重ねが崩壊した、最初の亀裂。だから私は祖母が嫌い。もう二度と、好きになることはない。この記憶を忘れない限り。永遠に。

小学一年生の時、姉が始めたからという理由で始めた剣道。私より後に始めた子が、私より強くなって、試合に勝っていた。その時、母が私に言った。「お前のほうが早く始めたはずなのだけどね」。その一言で、私の積み上げてきたすべてが壊れた。誰かより劣っていてはダメだ。誰かよりすごくなくては。もっと、もっと…。そんなことばかり考えていた。

勉強でもそうだ。私の周りには、「お姉ちゃんはもっと」が付きまとってきた。姉は、姉

なら、姉はもっと。いつもそうだ。姉よりすごくなくてはならない。友達より、母の知り合いの子より、姉の友達より、すごくなくて。最後のほうなんて、もはや誰だよと呆れるぐらい、私は比べられてばかりだった。私には、どこまで頑張ったら褒められるのかわからない。最大限の努力でも、あの子はもっと、が付いてくる。一個間違えれば、それは誰より劣っていて、嘲笑われるのが目に見えていた。もう嫌だった。間違えてはいけない。優等生でなくてはならない。それでも、私は勉強なんか嫌いだった。

「分かる」「楽しさを知っていた。だから完全には嫌いになれなかった。そんな中途半端な状態だったから、私は今、母の言う底辺高校にいる。ここがいい、ではなく“もうここでいいや”が本音だった。もし、中途半端じゃなければ、母の思う高校に行けただろうか。

私の人生はもう少し変わっていただろうか。

もう、何一つわからないけど。頑張る意味を

忘れた。褒められた時の気持も忘れた。もう、何もわからない。私の心には何も残ってない。

言われ続けて、積み重なった言葉は、二度と消えない記憶となって、私を縛る鎖になった。

何かをするたびに、新しい事に挑戦しようとするたびに頭の中で母に言われる。「お前にできるわけがない」「どうせすぐに逃げる」

「お金と時間の無駄」その言葉を思い出すたび、私の中の大切が壊れていく。誰でもいいから、私は私のままでいいと言って欲しかったけれど。言ったところで全部無駄だと諦めてしまった。そういえば最近、祖母が欲しい本を買ってくれると言っていた気がする。思ってはいけないけれど、思ってしまった。今すぐ殺してやろうか、と。まだ堪えきれる殺意だった。でも、いつの日か堪えられない日が来るのだろう。だからきっと私は、勉強でも、剣道でも、人としても。劣等生だ。